

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	安藤 淑子（岐阜県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第109号
学位授与の日付	令和2年3月25日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条
学位論文題目	原始仏教におけるkāmaの研究
論文審査委員	主査 山極 伸之（佛教大学教授） 副査 細田 典明（佛教大学教授） 副査 並川 孝儀（佛教大学名誉教授）

〔1〕論文の概要

本提出論文は、原始仏教の經典中に現れるkāma（カーマ）に焦点を当て、A) 原始仏教經典に見られるkāmaの語義・用法の特徴と変遷、B) kāmaと原始仏教思想との関係、という二つの課題を設定して考察を行ったものである。この研究を進めるにあたって論者が用いた文献資料は、パーリ聖典において三藏中の經藏を形成するディーガ・ニカーヤ、マッジマ・ニカーヤ、サンユッタ・ニカーヤ、アングッタラ・ニカーヤ、クッダカ・ニカーヤの、いわゆる五ニカーヤである。加えて、近年の原始仏教研究における研究成果を踏まえ、クッダカ・ニカーヤに含まれる重要な韻文經典を最古層・古層に区分するとともに、サンユッタ・ニカーヤ中の古層に属するとされる韻文部分をそれ以外の散文經典群と区別し、經典の成立史に関しても作業仮説を設定しながら、kāmaの語が、それぞれの資料においてどのような特徴を示し、最古層から古層、さらにはその後の原始仏教思想確立の過程で、いかに位置づけられ、どのように変遷していったのかを解明しようとした意欲的な研究である。

本論文の構成は以下の通りである。

序論

第一章 原始仏教興起以前の思想に現れるkāma

第二章 古層韻文經典におけるkāma（1）-Suttanipātaを中心に-

第三章 古層韻文經典におけるkāma（2）-TheragāthāとTherīgāthā-

第四章 散文經典におけるkāma（1）-kāmaの思想的位置付けの変化-

第五章 散文經典におけるkāma（2）-教理項目の構成要素としてのkāma-

結論

まず序論において、論者は、kāmaの語が經典中に使用される頻度なども材料としながら、課題を設定した理由を明らかにしている。さらに、課題を説明するために用いる資料の範囲を定めた上で、具体的に採用した研究方法の前提となる主要な先行研究の内容を詳細に提示し、それらの先行研究を踏まえた上で論者の研究の立場を明示しており、自身の研究の方向性とそのための研究方法を明確化している。

第一章では、原始仏教興起以前のインド思想の中に現れるkāmaがいかなるものであったのかについて考察を行っている。その際、インド思想において最古の文献とされる『リグ・ヴェーダ』からはじまる、いわゆるヴェーダ文献において、kāmaは、唯一物が世界へと展開する動因となった内発的な力とする。さらに古ウパニシャッドにおいては、人間の一切の行為を生み出す根本的な動因とみなされ、「意欲」「意志」などを意味していたとする。あわせて古ウパニシャッドでは、世俗の世界を希求するkāmaと、宗教的な世界を希求する「真実のkāma」とがあることを指摘する。その後の正統派の諸思想においても、kāmaは先行思想の内容を受け継ぎ、人間の一切の行為を生む動因とみなされていたとする。一方、時代が下がるにつれて、正統派の文献中にも、原始仏教に類似した否定的なkāmaの記述が見いだされることも明らかにしている。

第二章では、原始仏教經典のなかで最古層ならびに古層に位置づけられる『スッタニパータ』を資料として取り上げ、そこでのkāmaの用例が、第一章で確認した先行する諸思想との間でどのような違いを有しているのか、また『スッタニパータ』においても、最古層とされる第4章・第5章と、古層とされる第1章～第3章とにおいて、kāmaの語義や用法に違いがみられるのかについて検討を行っている。その結果、最古層におけるkāmaは、求道者の生活態度として実践される「無所有」思想と同趣旨の教説として現れ、「kāmaの棄却」という形で説かれていたとする。さらに最古層においては、後の原始仏教において定型化されるpañca kāmagaṇāの用例は存在せず、第4章にのみ別種の思想が見られること、古層部分には若干の用例があることを明らかにしている。加えて、kāmaの語義に二面性があること、また殆どの用例が「複数形」であり、具体・多様な現象の集合体を表していることから、『スッタニパータ』におけるkāmaの捉え方が、そこに反映していると指摘する。

第三章では、第二章の考察を踏まえ、古層の韻文經典である『テラガーター』と『テーリーガーター』におけるkāmaの語義と用法とについて検討を行っている。具体的な事例の検討を重ねた上で、『テラガーター』と『テーリーガーター』に見られるkāmaは、『スッタニパータ』と同じようにその大半が「複数形」の語形であり、「欲せられたもの」としての語義を持つとする。その上で、両經には、『スッタニパータ』には見られなかった特徴として、pañca kāmagaṇāの用例中に、散文經典にも見られるようなkāmaよりも限定的な語義による用法があるとする。また、『テラガーター』では、「愛すべき事物」に対する執着の発生に関して、感覚器官と対象を分析的に説く教説があること、さらには

『スッタニパータ』に現れた「kāmaに対する<心の働き>（を調御する）」という表現が殆ど見られないとする。加えて、『テラガーター』には、kāmaのもたらす喜びに言及し、かつこれを忌避する偈が多数現れることを指摘している。

第四章では、散文經典において定型化され、原始仏教の主要教理として体系化されるに至った諸思想と同様に、古層韻文經典に現れたkāma思想の一部が、散文經典において教説として定型化されている点について検証を行っている。基本的には、ディーガ・ニカーヤ、マッジマ・ニカーヤ、サンユッタ・ニカーヤ、アングウタラ・ニカーヤ、の四ニカーヤを対象として、古層韻文經典に出自をもつ「kāmaに対する<心の働き>（を調御する）」という表現形式が、1)「心の働き」に関する種々の概念が組み合わされ、表現形式が拡張される点、2)「心の働き」の対象として、「五蘊」「六処」といった原始仏教における「一切」の概念が置かれ、これによって当該の表現形式を用いた教説が普遍化していく点を明らかにしている。さらに、散文經典において、対象事物を意味するkāmaの大半が、pañca kāmaguṇāという分析的な用語に置き換えられ、その定義文が教説の定型表現として定着していったとする。また、散文經典において定型化されるpañca kāmaguṇāの定義文は、「五」を基調とする教説として「六処」の教説と併存したが、時に「六」に対応する教説へと転換される場合があり、散文經典において主潮流となった「六処」思想の影響が現れていることを指摘している。

第五章では、散文經典において、いくつかの教理項目の構成要素として現れるkāmaに着目し、「三漏」「三愛」「五蓋」「七隨眠」などの教説において、構成要素として現れるkāmaについて考察を行っている。そこでは、kāmaが、多くの場合bhavaという概念と一緒に用いられること、また両者が構成要素となる教理項目の中でも「三漏」の出現率が高く、しばしば「漏尽智」の教説と共に現れるとする。また、kāmaを構成要素とする「三愛」において、「有愛」におけるbhavaとtaṇhāは、『スッタニパータ』の頃より緊密な結びつきを有しているのに対し、kāmaとtaṇhāの関係性はさほど強固なものではないとし、その理由としてkāmaとbhavaの並行的な関係性という思想的な枠組みが当初よりあったことも推測されるとしている。さらにkāmaは、「三不善尋／思／想／界」という教理項目において、「怒り」の概念と一緒に用いられているとし、このようなkāmaの用法は原始仏教經典に通常見られるものとは性質を異にするものであるとする。

以上五章にわたる検討を通して各章で明らかになった点を再度ピックアップし、それぞれを、A) 原始仏教經典に見られるkāmaの語義・用法の特徴と変遷、B) kāmaと原始仏教思想との関係、という二つの課題との関係の中で整理し直し、全体として明らかになった事実を総括したものが、結論として最後に提示されている。そして、最終的に、原始仏教におけるkāmaの語義・用法及びその変遷が、原始仏教思想と密接に連動していることを再度確認した上で、kāmaは、原

始仏教の主要教理の中に中心的な地位を得ることができなかったと結論づけている。それは、kāmaが出自の古い概念であり、当初より一定の語義・用法を担っていたこととも関係し、kāmaの可変性の幅が狭くなり、新たな教理との合流を困難にしたことを理由として示している。

〔2〕 審査結果の要旨

本論文は、ヴェーダ聖典に始まり、ウパニシャッド文献において世界の動因となる内発的要因として人間のあらゆる行為を生み出す根本と考えられていたkāmaが、バラモン教と対峙して成立した仏教においてどのように説かれることになったのかをテーマとして考察を行ったものである。新たに興起した仏教がどのように根本的立場を築き上げていったのか、その一端を明らかにしようとする姿勢がこの研究の底流にある。kāmaはインドの宗教にとって極めて大きな意義をもつ用語にもかかわらず、これまで仏教において、とりわけ初期仏教において、これを論点として詳細に研究されることがなかっただけに、本論は有益な論考といえる。

研究にあたって、基本的に現存するパーリの経蔵全体を対象とし、そこに含まれているkāmaの用例を網羅的に抽出し、一つひとつの事例を丹念に検討した上で、そこに現れる具体的な事実に基づいて考察を行っており、研究の視点・問題意識・方法ともに論者の研究者としての真摯な姿勢を表すもので、本研究は優れた労作であると評価できる。また、第一章では意味内容が広く、用例も多岐に亘るkāmaについて、『リグ・ヴェーダ』やウパニシャッドなど、正統バラモン教の諸文献における用例についても考察を加えている点で、意欲的な論文として評価に値する。さらに、第二章以降で行われるパーリ原典の読解についても、正確な読みと理解を示しているという点で、高い水準にあると言える。ただし、細部について見た場合は、読解ならびに翻訳という点でまだまだ課題も残されている。論者自身が記しているように、正確な翻訳を目的とする研究ではないとは言え、教理・教説の正しい解釈は、原語の正確な理解に基づくものであることは言うまでもない。その点で、正確な理解を担保する翻訳の提示にも、より一層、留意する必要がある。

論者は、その視座から初期経典を『スッタニパータ』の第4章・第5章を最古層経典とし、そこから古層経典の『スッタニパータ』第1章～第3章を、そして『テーラガーター』、『テーリーガーター』といった韻文経典、さらに散文経典へと展開したとされる、多くの先学の成立学的立場に従ってkāmaの用例

をきめ細かく精査し、その用法を考察している。その際、本論の特に第二章、第三章で取り上げた考察においては、經典成立に関して序論で提示した研究の立場とは若干異なり、最古層と古層との区分が明確でないところがみられるのは残念である。両者には大きな展開が随所にみられるだけに、その区分には精度が必要となろう。というのも、仏教が成立した当時の立場が何であるのかは何よりも最古層經典に反映されているはずであり、まずはそれに対する徹底した研究が求められるからである。

また論者は、古層經典における *kāma* の用法には、それまでのバラモン教の根本的動因を意味する用法はみられず、それも人間にとって否定的な意義をもつものとし、さらに二面性を有する語義のうち、執着される対象とする用例が大半で、執着する心理的作用を示す用例がみられないことを明らかにしている。こうした指摘は大変重要であり、論者の研究の成果の一端がそこに現れている。さらに、比較的成立の新しい『テラガター』、『テーリーガター』といった韻文經典、さらに散文經典への展開において教理が進展するにしたがって、さまざまな教理解釈の範疇の中に組み込まれた *kāma* も新たな展開を遂げることになるが、その用例を丹念に精査した上で、その用法は基本的に最古層經典と変わらない、初期仏教全体に一貫した姿勢を示していることを明らかにしている。

その一方で、*kāma* の用法が人間にとって否定的な意義をもつものであるとするならば、その上でまずはなぜそうであるのかについても、論者は考察すべきであったと言える。最古層の『スッタニパータ』第5章には、人間のあるべき道として、まず自らが苦の存在であることを自覚し、修行を通して苦の原因である執着とか渴愛、貪りなどを滅するという仏教の根本的立場が繰り返し説かれていることから、「欲望の対象」の「欲望」である *kāma* が否定的に説かれることは当然であった。その一方で、執着する心理的作用が *āsā*、*kaṃkhā*、*taṇhā*、*chandarāga*、*āsaya*、*āsaṇa*、*gedha* などの語が用いられているにもかかわらず、なぜ *kāma* がそこでは使用されず、「欲望の対象」としての欲望としてのみ使われているのか、初期經典全般にわたってこの用法が継承されていくだけに、その理由を考察しておく必要があるだろう。論者は、*kāma* が本来は個人の内に発生する主観性と、それとは無関係に存在する客観性とを有しているとの立場から、「欲望の対象」を意味する *kāma* にも本来は「心の働き」という作用が含まれていると解釈するが、それでも執着する心理的作用に *kāma* が用いられていない説

明としては不十分といわねばならない。またこれと関連して、例えば、*kāmapaṃko* (Sn 945偈) や *kāmaṃ* (Sn 909偈)、古層ではあるが *kāmakāmā* (Sn 239偈) のような、「欲望の対象」を意味する用法とは異なるのではないかと思われる例があれば、それらの用法についても考察する必要があるであろう。いずれにせよ、こうした諸問題も、本論でなされた *kāma* の詳細な研究に基づき、仏教の根本的立場に関連するさらなる幅広い研究によって有益な結果がもたらされることは間違いない。また、仏教と同時代のジャイナ教において、*kāma* がどのように使われていたのかについても考察すると、仏教の立場が一層鮮明になるはずである。この点についても今後の研究課題とすることで、さらなる知見や新たな成果が大いに期待される。

一方、細部に関しては問題となる点も認められる。訳文の提示については先にも述べたが、その他にも誤記が一定残されており、表記方法の不統一や略号の使用方法なども含め、修正を行う必要がある。また、第一章の表題を論者は「原始仏教興起以前の思想」としているが、内容的には「仏教興起以降の正統派の諸思想」も含まれることになるため、第一章については「正統派諸思想」として概説することが望ましかった。さらに、第五章では、教理項目中に現れる *kāma* の理解に際して、論蔵や註釈書の解釈を提示し、それを根拠としてそのまま用いている場合があるが、この方法には問題がある。論蔵や註釈書の解釈を *kāma* の理解のための一つの事例として提示することはできても、そのまま結論的な解釈として使用したのでは、文献の成立史を前提とした当初の研究方法の設定と矛盾することとなる。この点については留意する必要があるだろう。

以上のような問題点も認められるが、これらの点が論文全体の価値を損なうものではない。本論文は、膨大な資料や事例に臆することなく、様々な用例を経典の成立史を踏まえた区分のもとで丹念に抽出し、一つひとつ丁寧に読解して整理を行っていくという厳密な研究姿勢に基づく成果であり、これまで初期仏教の思想研究においては殆ど注目されてこなかった *kāma* の語義・用法を明らかにするという点で、多くの明確な特徴を提示することに成功しており、その点は高く評価できる。以上の点から、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいものであると判断する。